



Title	尊敬語の類型論
Author(s)	山田, 彬堯
Citation	日本言語学会第162回大会予稿集. 2021, 162, p. 82-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85143
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

尊敬語の類型論 Typology of subject honorifics

山田 彬亮 Akitaka Yamada¹

¹ 大阪大学 言語文化研究科

Abstract: Researchers from several different theoretical backgrounds have pursued the study of honorification (Takiura 2017, forthcoming; Yamada 2019, to appear, a). Certainly, Japanese has played a central role in this field (Kikuchi 1997 [1994]). However, it has become apparent that honorific expressions are distributed across a wide range of genealogically-unrelated languages. Yet, no comprehensive study has given an exhaustive description of honorification's typological variation. After briefly tracking the study of honorification, this article thus illuminates five independent points of view that facilitate our understanding of the cross-linguistic variation in subject honorifics: (i) morphosyntactic realization, (ii) target of respect, (iii) historical origins, (iv) competition, and (v) interaction with other grammatical expressions.

Keywords: honorification • subject-honorific expressions • typology

Submitted March 14, 2021; Accepted April 14, 2021; Presented June 26, 2021

1. はじめに

文法体系に組み込まれた敬語形式の存在は、これまで、日本語や韓国語などの一部の東アジア言語に特有の性質であると見なされてきた。もちろん、敬意を表す表現自体はどの言語にも備わっており、多くの研究者に馴染みのある西洋語でも代名詞 (例: tu-vous の対比) やモーダル (例: can you/could you の違い)、タイトル (例: Queen Elizabeth)、発話行為副詞 (例: please) といった言語要素に敬意を読み取することは可能であるわけだが、敬意に基づいて項 (主語、目的語) と述語の間に体系的な対応関係が成立するという点で、尊敬語・謙譲語は上記に挙げられた事例とは大きく異なる性質を持っている。

* 本研究は 2020-2021 年度研究活動スタート支援「敬語表現の選択: コーパスを用いた一般化階層ベイズモデリングの理論言語学への統合 (代表: 山田彬亮) (#20K21957) の支援、および 2021-2026 年、研究拠点形成事業 (先端拠点形成型)「自然言語の構造と獲得メカニズムの理解に向けた研究拠点形成 (代表: 宮本陽一) (#JPJSCCA20210001) の支援を受けたものです。またこの研究は 2020 年 11 月 30 日に行った「実践的理論言語学研究会 (立命館大学)」での発表の内容の一部を修正・発展させたものでもあります。研究会を主宰いただいた藏藤健雄先生並びに貴重なご意見、ご指摘をくださった参加者の方々に心より感謝申し上げます。なお当然、本稿の全ての誤りは筆者の責に帰すものです。責任著者: E-mail: a.yamada@lang.osaka-u.ac.jp

そのため、敬語構文は「日本語や韓国語に特徴的な言語要素」として認知されてきたわけである。

しかし、それでは、尊敬語や謙譲語は「日本語と韓国語 “だけ” に特徴的な言語要素」なのだろうか。つまり、日本語や韓国語以外に文法化された敬語システムを持つ言語はあるのだろうか。あるのなら、そのシステムは、どの言語でも同じようなものに落ちているのだろうか、それとも、個別言語間で何らかのバリエーションを示すのであろうか。

日本語における敬語研究の厚い蓄積とは対照的に、このような通言語的／類型論的視座から尊敬語や謙譲語の性質に取り組んだ研究は、これまでほとんど存在していない。1970 年代に編まれた敬語に関する 10 巻からなる「敬語」シリーズには「世界の敬語」という巻が収められ、日本語以外の言語の敬意体系の比較が試みられているが、そこで論じられている言語サンプルには偏りがあり (中国語、韓国語や一部の西洋の言語など)、様々な語族における尊敬語や謙譲語の可否についての詳しい記述は見当たらない。敬意を持つ代名詞に限って言えば、Head (1978)、小泉 (1984) や Helmbrecht (2003) などに世界の諸言語についての詳しい記述が見られる

が、尊敬語や謙譲語についての類型論的な言及はない。ハンドブックに収められた記述・論文についてもあまり状況は変わらず、例えば、Shibatani (1998) では、尊敬語と謙譲語としては、日本語、韓国語、チベット語の三つが取り上げられているだけであり、日本語文法学会編 (2014:204-205, 366-367) や Hasegawa (2017 [2006]) では、主に日本語を中心に議論が進められている。

こうした現状を鑑み、本研究では紙幅の制約から対象を尊敬語に限りながらも、これまで俎上に載せられてこなかった言語における敬語体系の存在を明確に提示し、通言語的な視点からそれらの類型の整理する五つのパラメータを提案する。

2. 先行研究：敬語研究の進展

敬語は、これまで様々な言語学の枠組みで横断的に研究され、その歴史も長い。日本語の敬語研究の試みとしては Rodriguez による *Arte da Lingoa de Iapam* (1604-1608) にその萌芽が見られるが、体系的研究が開始されたのは 19 世紀後半／20 世紀の国語学の伝統においてである (滝浦 2017; Takiura forthcoming; Yamada 2019)。山田孝雄に代表されるように、敬語は、西洋諸言語に観察されるような一致の体系を持たない日本語に見られる「一致に比せられる現象」として脚光を集めてきた (山田 1924)。この考え方に対しては様々な改良、あるいは批判、異説が唱えられていくことになるが、下記に見るように 100 年たった今日の言語学においても、類似した考え方は繰り返し提唱され、「一致」への注目は敬語研究における重要な研究の出発点となっている。

このように国語学の枠組みからスタートした敬語研究が多様化を見せるのが 1970 年代である。第一に、この時期は語用論、とりわけポライトネス理論 (Brown & Levinson 1987 [1978]) の興隆の時期に重なり、敬語は同理論の主要な研究対象として認知され、語用論／社会言語学において大きなプレゼンスを持つことになる (滝浦 2008, 2017, forthcoming)。またその後も、ゲーム理論 (van Rooy 2003)、情報の縄張り理論 (Kamio 1995)、わきまの語用論 (井出 2006)、文文化・間主観化 (Dasher 1995) など、敬語の持つ対人的意味・機能は語用論・社会言語学・認知／機能主義言語学といった人間の言語使用に関心を寄せる様々な言語学の枠組みで研究の対象となっている。

第二に、1970 年代は、先に見た「一致 (のような性質)」が、生成文法という海外の理論言語学の枠組みに紹介され、議論されるようになる時期でもある (Prideaux 1970; Harada 1976; Kuno 1983 [1973]; Shibatani 1977, 1978)。介入効果 (Intervention effect) の存在から敬語が一致一般に見られる性質を有すると見なされる一方 (Niinuma 2003; Boecks & Niinuma 2004) 典型的な項-述語の一致とは異なりその使用に語用論的な側面が関わっているという点も指摘され (Matsumoto 1997; Bobaljik & Yatsushiro 2006; Kim & Sells 2007) 「一致」との類似性や相違点が論じられている。また、近年では、同問題は分散形態論の視点からも深められている (Choi & Harley 2019; Oseki & Tagawa 2019; Yamada 2019; Ikawa & Yamada forthcoming)。

敬語研究の多様化は、この 1970 年代の後にもたびたび生じており、とりわけ、2000 年代と 2010 年代はそれぞれそれまでの時代とは異なる研究領域・角度から敬語研究が進展したことが特筆に値する。2000 年代は、Christopher Potts の博士論文 (Potts 2003) を皮切りに、形式意味論における敬語研究が本格化する時期である (Potts & Kawahara 2004; Potts 2007; McCready 2014, 2017; Portner et al. 2019)。とりわけ、近年ではベイズ統計学を組み込んだフォーマルな語用論の理論からその意味・機能が分析され、言語学から応用統計学・AI・機械学習へその研究領域が広がりつつある (Yamada 2019; Yamada & Donatelli 2020; Yamada to appear, b)。

続く、2010 年代は、聞き手敬語の研究が通言語的に広まりを見せる時期である。聞き手敬語は、敬語の一部としてだけではなく「聞き手表現」の一部として位置づけることができ (Antonov 2015)、聞き手の性別 (Gender) や数 (Number) を表す表現とともに allocutive な情報を表示する表現だという視点から研究が進められ、その中で、日本語 (Miyagawa 2012, 2017; Yamada 2019) や琉球諸語 (アントノフ 2016) や韓国語の *-eyo/-supnita* (Portner et al. 2019) 以外にも、パンジャブ語 (Kaur 2017, 2020) や Magahi 語 (Alok & Baker 2018; Alok to appear)、タミル語 (McFadden 2020)、バスク語 (Haddican 2018)、タイ語、ミャンマー語などにも聞き手敬語の存在が知られるようになり、その比較研究が進みつつあり、2021 年にはこの視点に立ったワークショップがアメリカの LSA などで開催されている。

3. 尊敬語の類型論

このように敬語研究は、国語学の中から発達し、統語論、語用論、社会言語学、機能主義言語学、形式意味論、そして通言語的な比較と、実に幅広い観点から研究が積み上げられてきたわけであるが、だからと言って現段階でその複雑な諸相が全てつまびらかになってきたというわけではない。

本稿ではこれまでの研究で明らかになってこなかった重要なトピックとして尊敬語の類型論を議論する。上記に述べた聞き手敬語同様、尊敬語についても日本語や韓国語を超えてこれまで考えられてきた以上の言語でその存在が確認される。本稿の第一の目的は、そのような言語の存在を日本の研究者に紹介することにある。そして第二の目的として、それらの尊敬語に見られるバリエーションを指摘し、それらを整理する類型論的な視点を提案する。

3.1 視点 1：形態統語的な表出の仕方

尊敬語の形態統語的な表出には複数のタイプがある。第一は、尊敬語に特化した独立した形態素が存在するケースである。例えば、(1) の中期朝鮮語の *-ósi*、現代韓国語の *-si*、中世日本語で補助動詞として使われる「給ふ」などがこのタイプに属している。

- (1) 中期朝鮮語
 maja pwin-i ... esten injen-ulo
 Lady Maja-NOM what fate-as
 jelaj-lól nas-sóβ-**ósi**-ni-ngi-sko
 Buddha-ACC give.birth.to-OH-SH-IND-AH-Q
 ‘For what fate, did Lady Maja give birth to Buddha?’ (Sohn 2015:177)

第二は、尊敬語の意味が他の意味と合体して表現されるケースである（融合 **Fusion**）。(i) 語彙範疇と融合した事例は、いわゆる不規則動詞として知られるものである。日本語の「いらっしゃる」などの例のほか、韓国語や Ladakhi 語など他の言語にも観察される。(ii) 機能範疇と融合をするケースには複数の事例が存在する。(a) アスペクトと融合する例としては日本語の進行・完了相「ている>ていらっしゃる」、(b) 試行相「てみる>てごらんになる」などがある。(c) 適用形 (applicative) と融合する事例には「てくる>てくださる」がある。(d) 丁寧語との融合には (2) に示される Magahi 語、(e) 謙譲語との融合には (3) に示される Maithili 語が挙げられる。

- (2) Magahi (Alok to appear; Yamada to appear)

尊敬語/丁寧語	NH	H	HH
Non-honorific	-au	-o	ain
Honorific	-thu(n)		-thi(n)
High-Honorific	-thu(n)		-thi(n)

- (3) Maithili (Yadav 1996; Yamada to appear)

尊敬語/謙譲語	1	2 (NH)	2(MH)
1	—	iəuk	-iəh
2 (Non-honorific)	0	—	—
2 (Mid-honorific)	0	—	—
2 (Honorific)	0	—	—
3 (Non-honorific)	0	əuk	əh
3 (Honorific)	0	əthunh	əthunh
尊敬語/謙譲語	2 (H)	3 (NH)	3 (H)
1	0	iəikl/0	iəinh
2 (Non-honorific)	—	əhik/0	əhunh
2 (Mid-honorific)	—	əhək	əhunh
2 (Honorific)	—	iəik/0	iəinh
3 (Non-honorific)	0	əik/0	əinh
3 (Honorific)	0	əhinh	əthinh

なお、語彙範疇との融合は補充形 (suppletion) の一種とも見なすことができ、ブロック効果 (blocking effect) から注目されている。例えば、韓国語の *iss-* ‘exist’ には否定補充形 *eps-* ‘not exist’ と尊敬補充形 *kyey-si* ‘exist-SH’ の二つが存在するが、否定かつ尊敬の意味を表すときには、否定補充形が尊敬補充形にブロックされることが知られている (Chung 2009:544-545; Choi & Harley 2019:1349)。ただし、尊敬の補充形が常にブロック効果を示すわけではない。例えば、「いらっしゃる」の存在は「行かれる／お行きになる」を完全に容認不可能とさせることはなく、また「お-召し上がり-になる」に見られるように補充形が規則的マーキングを伴って出現することもある。規則形が重なったパターンは日本語以外にも、Ladakhi 語などにも見られ (= (4))、典型的な補充形 (例: *went-*goed/*wented*) とは異なる尊敬語補充形の重要な性質として考えられる。

- (4) Ladakhi (Koshal 1987; Yamada to appear)

a. rtsig	b. žəŋ	c. žəŋ-ŋə-ðəd
build	build.SH	build.SH-ŋə-do.SH

第三は、複数の形態素が共同で尊敬語の意味を担うタイプのものである。一種の接周辞 (circumfix) とも見なせるもので、現代日本語の「御…になる」がこれに該当する。

この三番目のカテゴリーと区別して捉えられる

べきが (5)b に示したような多重尊敬語構文 (Multiple subject-honorific constructions) である (Ikawa & Yamada forthcoming)。尊敬語の意味は、動詞周辺で一度表示されているにもかかわらずアスペクト標識においても再び表示されている。

- (5) a. [お走りになって] も いる。
b. [お走りになって] も いらっしゃる。

主語の特性が複数の位置の形態素に影響を与えるという点では、*la casa blanca* (スペイン語) のようなコンコードなどとも類似しており、尊敬語を一致として捉える立場にとっては示唆的なデータとなる。

なお、一致とみなす場合、(6)a におけるフランス語の *vous* などが引き起こす多重一致との比較が重要な価値を持つ。フランス語のコピュラ文では、(6)a に示されるように「複数」の意味では動詞と形容詞に一致が見られるが、「敬意」の意味では (6)b に示すように動詞以外に一致は見られない。主語位置に表現された「敬意」がどの要素に、何回にわたり影響を与えるのか、そしてそれは随意的かという点について理論化が俟たれている。

- (6) French (Wechsler 2011:1000)
a. **Vous** { *es/êtes } { *loyal/loyaux }.
‘You (pl.) are loyal.’
b. **Vous** { *es/êtes } { loyal/*loyaux }.
‘You (sg. formal, male) are loyal.’

3.2 視点 2 : 敬意の対象

どのような対象に敬意が向けられるのかという点についても言語間で違いが存在する。

第一は、格に関するバリエーションである。日本語においてはこれまで「主語が何かを判定するためのテスト」として、例えば (7) のような「二格-ガ格」を持つ構文の主語がガ格ではなく二格であることの根拠の一つとして、尊敬語が利用されてきた (Shibatani 1977:800; 菊地 1997 [1994])。

- (7) 先生には 英語が お分かりになる。

一方、Magahi 語では類似した環境であっても (8) に示されるように、尊敬語は与格項には一致せず、言語間のばらつきが窺い知れる。

- (8) Magahi (Alok to appear)
Santee-aa-ke baabaa pasand
Santee-NH-DAT grandfather.H like

ha-{thi(n)/*ai}

be-H/*NH

‘Santee likes the grandfather; the speaker respects the grandfather.’

第二に、人称の制約についても言語間での差が観察される。まず、現代日本語や古典ナワトル語では「*私／あの方／貴方が仰る」のように三人称主語と二人称主語においてのみ尊敬語は許容される (Launey & Mackay 2011:214)。一方で、(6) に引いたフランス語では二人称のおいてのみ主語と述語に敬意をベースとする対応関係がマークされる。最後に昔の日本語やアイヌ語のユーカラには、いわゆる自敬表現と呼ばれる現象が存在し (限定的な文脈で) 一人称と尊敬語が生起することが可能である (西田 1995)。例えば、下記の例では一人称主語が尊敬の助動詞「せ」を伴っている例である。

- (9) 古典日本語 (古事記、西田 1995)
和何多々勢礼婆 (わがたたせれば)
「私 (八千矛神) がお立ちになってしまえば」

ある言語で尊敬語に一人称主語が許されれば、二・三人称主語でも、三人称主語で許されれば二人称主語でも用いることができるというように、人称制約について次の含意階層が存在している。

- (10) 一人称 < 三人称 < 二人称

3.3 視点 3 : 歴史的なルーツ

どのような言語要素から尊敬語が発達したのかについては大きく三つのグループが存在する。

第一は、数 (Number) を起源とするものである。例えばアイヌ語の *-pa* という接尾辞は、複数形と同形であり (11) には複数読みと尊敬読みが可能である。

- (11) アイヌ語
kor-**pa**.
have-PL/SH
‘(They.PL) have.../(He.HON) has...’

この点でアイヌ語はフランス語の *vous êtes* が二人称単数継承と二人称複数の間で曖昧であることと類似しているが、三人称主語に使えること (3.2 節参照) に加え、アイヌ語の *-pa* は (12) が示すように複数形を表す接辞と共起できる点で差が存在している (金田一・知里 1936:52-53)。

- (12) kor-**pa-re-pa**
have-PL-CAUS-SH
‘(the subject.SH) make ... have them a lot.’

第二は、結合価 (valency) を変化させる構文である。日本語の「(ら)れる」は受動態起源のなじみ深い例であるが (Shibatani 1985)、(13) に見られるように、類似した方略は Timucua 語 (Broadwell 2019) などにも観察される。

- (13) Timucua 語 (Broadwell 2019)
 Jesus Christo nihi-**ni**-qe
 Jesus Christ die-HON:PASS-and:then
 ‘Jesus Christ died and then’

再帰形 (reflexives) も結合価を下げる働きを持ち、この方略で尊敬語を表す言語に古典ナワトル語の自動詞が挙げられる。例えば、一項動詞 *cochi* は使役接尾辞 *tia* を付けることで二項動詞となり、その増加した項を self を表す *mo-* という前接辞で埋めることによって尊敬の意味を表すことが知られている。

- (14) 古典ナワトル語
- a. *cochi*
 sleep
 ‘S/he is sleeping.’
 - b. *cochī-tia*
 sleep-CAUS
 ‘S/he is making ... sleep.’
 - c. **mo-cochī-tia**
 self-sleep-CAUS
 ‘S/he is sleeping (lit., S/he is making her/himself sleep).’

一方、古典ナワトル語の他動詞では、適用形 (applicative) を用いて結合価を増やし、その増加した項を再帰形で埋めることで尊敬語を作るという操作が用いられており、項の増減と敬意の表示に密接な関係があることが窺い知れる。

第三に、上記に見た機能範疇に基づく尊敬語形式とは対照的に、語彙範疇から発達した尊敬語形式も存在する。例えば、Timucua 語の *ano-* という尊敬語前接辞は名詞起源であるとされる (Broadwell 2016)。日本語の「御…になる」「御…なさる」などに生起する現代日本語の接頭辞「御」は、「おほみ」>「おん」という過程を経て「お」と発音されるようになったとされ (辻村 1968:130)、この「おほみ」を「おほ」と「み」の結合により生じた表現と見做すのであれば、「大きい」「多い」などつながりのある形容詞語幹が尊敬語構文を構成する重要な部品となっていると分析されることができであろう。

3.4 視点 4：共時的な構文の競合

尊敬語の類型論的比較には、競合 (competition) という視点も重要である (Yamada 2020b)。韓国語の尊敬語形式は基本的に *-si* 一本であるが、これに対し、日本語では (15) に見るように複数の形式が競合し、どの程度述語の形にバリエーションが存在するのかという点で言語の間に差が観察される。

- (15)
- a. 先生が ご到着された。
 - b. 先生が 到着された。
 - c. 先生が ご到着になった。
 - d. 先生が 到着なさった。
 - e. 先生が ご到着なさった。

「(ら)れる」「(ら)る」に基づく形式が歴史的にに先行し、「なさる」に基づく形式が江戸時代に、唯一「御」の使用が義務的である「御…になる」が明治時代に登場するなど、それぞれの形式が生産的に使われるようになった時期にはずれがある (山田 2015)。にもかかわらず、新規表現の登場は必ずしも既存の形を駆逐するに至っているわけではなく、尊敬語を一致としてみなす立場では、とりわけ、なぜ共時的に競合が存在しているのかについての理論的説明を施す必要がある。英語でも、(16) に見るように一部の方言で主語述語の一致にバリエーションが存在すること自体は指摘されているが (Adger & Smith 2010: 1110)、これほどまでも多くの候補が競合している事例は珍しい。

- (16) Buckie English (North-East Scotland)
- a. Buckie boats were a’ bonny graint.
 ‘Buckie boats were all nicely grained.’
 - b. The mothers was roaring at ye comin’ in.
 ‘The mothers were shouting at you to come in.’

3.5 視点 5：発話行為表現との相互作用

尊敬語の整理をする際に、他の文法形式と依存関係にあるかという視座も重要である。例えば、現代日本語では、(15)a-d に見るように尊敬語構文は「命令形」にできないか、(15)e のようにできたとしても平叙文に見られるような主語 (聞き手) に対する敬意は表現できない (Svahn 2016; Yamada 2020a)。

- (17)
- a. *お走られ！ d. *走られ！
 - b. ??お走りになれ！ e. 走りなさい！
 - c. ?お走りなさい！ f. 走りなされ！

これに対して、(15)fに見られる近代日本語における表現では、敬意を持つ対象に対する助言として命令文が機能する。これは通時的な言語変化を表すが、共時的な視点からもどの言語で尊敬語構文が命令文で用いることができ、その際の発話行為がどのようなものになるのかを整理することは、敬意という話し手と対象との心的関係が、発話行為という話し手から他者への働きかけとどのような関係にあるのかを解明するうえで有益な情報を与えてくれることが期待される。

4. まとめと将来研究への示唆

敬語は、国語学、生成文法、語用論、社会言語学、機能主義／認知言語学、分散形態論、形式意味論など様々な研究者の興味を引いてきたが、通言語的な視座でその普遍性・多様性を論じた調査・研究は少ない。本稿では、尊敬語に対象を絞った上で、系統を異にする言語に見られる尊敬語のバリエーションを整理する五つの視点を提案した。

このような類型論的な視点が整うことで初めて組上に載せられる問いも多い。例えば、「日本語の尊敬語をフランス語の *vous êtes* を比較してその差は何か」を問うような試みは、両言語だけ見ているとそこに共通点が少ないため一見価値がないように思われるかもしれないが、アイヌ語のような両者の特徴をともに持つ中間的な言語の存在が指摘されることで、理論的価値のある問いとして見なされるようになるであろう。また、古典ナワトル語のように日本語以外にも受動態で尊敬の意味を表すような言語の存在が指摘されると、ミクロな視点で両言語の異同の調査する対照研究が進展するであろう。このような細かい尊敬語構文の比較・対照が、謙譲語や丁寧語といった他の敬語体系の通言語的調査とともに、私たちの敬語に対する理解を大きく深めてくれるものとして今後の研究に期待されてくるであろう。

参考文献

Adger, D. & J. Smith (2010). Variation in agreement: a lexical feature-based approach. *Lingua* 120, 1109–1134.
Alok, D. (to appear). The morphosyntax of Magahi addressee agreement.
Alok, D. & M. Baker (2018). On the mechanics (syntax) of indexical shift: evidence from allocutive agreement in Magahi. Ms., Rutgers University.
Antonov, A. (2015). Verbal allocutivity in a crosslinguistic perspective. *Linguistic Typology* 19(1), 55–85.
Antonov, A. (2016). 「琉球諸語のアロキュティビティ」『琉

球諸語と古代日本語』田窪行則, ジョン・ホイットマン, 平子達也(編), 235–257. 東京:くろしお出版.
Bobaljik, J. D. & K. Yatsushiro (2006). Problems with honorification-as agreement in Japanese: a reply to Boeckx and Niinuma. *Natural Language and Linguistic Theory* 24, 355–384.
Boeckx, C. & F. Niinuma (2004). Conditions on agreement in Japanese. *Natural Language & Linguistic Theory* 22, 453–480.
Broadwell, G. A. (2016). Honorific marking in the Timucua language. Florida Anthropological Society, Jupiter, FL. May 2016.
Broadwell, G. A. (2019). Honorific usage in Timucua exemplar. In *Preaching in New Worlds*, ed. by T. Johnson, K. W. Shelby, & J. D. Young. New York:Routledge.
Brown, P. & S. C. Levinson (1987 [1978]). *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Choi, J. & H. Harley (2019). Locality domains and morphological rules: phases, heads, node-sprouting and suppletion in Korean honorification. *Natural Language and Linguistic Theory* 37, 1319–1365.
Chung, I. (2009). Suppletive verbal morphology in Korean and the mechanism of vocabulary insertion. *Journal of Linguistics* 45, 533–567.
Dasher, R. B. (1995). *Grammaticalization in the system of Japanese predicates honorifics*. Ph.D. Thesis, Stanford University
Haddican, B. (2018). The syntax of Basque allocutive clitics. *Glossa: a journal of general linguistics* 3(1):101, 1–31.
Harada, S.-I. (1976). Honorifics. In *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar*, (ed.), M. Shibatani, 499–561. New York: Academic Press.
Hasegawa, N. (2017 [2006]). Honorifics. In *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*, Second Edition. ed. by. Martin Everaert & Henk C van Riemsdijk, 1836–1886. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
Head, B. F. (1978). Respect degrees in pronominal reference. In *Universals of human language vol. 3: word structure*, edited by Greenberg, Joseph. 151–211. Stanford: Stanford University Press.
Helmreich, J. (2003). Politeness distinctions in second person pronouns. In *Deictic Conceptualisation of Space, Time and Person*, edited by Friedrich Lenz. John Benjamins Publishing Company.
井出祥子 (2006). 『わきまの語用論』大修館書店.
Ikawa, S. & A. Yamada. (forthcoming). A Hybrid Approach to Honorific Agreement: a Sprouted Valued Feature and an Unvalued Probing Feature. *Proceedings of the 56th annual meeting of the Chicago Linguistics Society*.
Kaur, G. (2017). Variation in subject-triggered clitic restrictions: A Case of Punjabi. *Proceedings of Glow in Asia XI*, 111–126.
Kaur, G. (2020). Allocutivity as the locus of imperative syntax. *Proceedings of NELS* 49(2), 165–174.
Kim, J. & P. Sells (2007). Korean honorification: a kind of expressive meaning. *Journal of East Asian Linguistics* 16(4), 303–336.
Kimio, A. (1995). Territory of information in English and Japanese and psychological utterances. *Journal of Pragmatics* 24, 235–264.

- 菊地康人 (1997 [1994]). 『敬語』 東京: 講談社学術文庫.
- 金田一京助・知里真志保 (1936). 『アイヌ語概説』 東京: 岩波書店.
- Koshal, S. (1987). Honorific systems of the Ladakhi language. *Multilingua* 6(2), 149–168.
- 小泉保 (1984). 「外国語の敬語」『研究資料日本文法第 9 巻敬語法編』 鈴木一彦・林巨樹 (編), 198–216. 東京: 明治書院.
- Kuno, S. (1983 [1973]). *The structure of Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Launey, M. & C. Mackay (2011). An introduction to Classic Nahuatl. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Y. (1997). The rise and fall of Japanese non-subject honorifics: the case of ‘o-Verb-suru.’ *Journal of Pragmatics* 28, 719–740.
- McCready, E. (2014). A semantics for honorifics with reference to Thai. *Proceedings of Pacific Asia Conference on Language, Information and Computing (PACLIC)* 28, 503–512.
- McCready, E. (2019). *Honorification and social meaning*. New York, Oxford: Oxford University Press.
- McFadden, T. (2020). The morphosyntax of allocutive agreement in Tamil. In *Agree to agree: agreement in the Minimalist Programme*, ed. by P. W. Smith, J. Mursell & K. Hartmann. 391–424. Berlin: Language Science Press.
- Miyagawa, S. (2012). Agreements that occur mainly in main clauses. In *Main clause phenomena: new horizons*, ed. by L. Aelbrecht, L. Haegeman, & R. Nye, 79–112. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Miyagawa, S. (2017). *Agreement beyond phi*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 日本語文法学会 (編) (2014). 『日本語文法事典』 東京: 大修館書店.
- Niinuma, F. (2003). They syntax of honorification. Ph.D. Thesis. The University of Connecticut.
- 西田直敏 (1995). 『「自敬表現」の歴史的研究』 . 和泉書房.
- Oseki, Y. & T. Tagawa (2019). Dual suppletion in Japanese. *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics* 15, 193–204.
- Prideaux, G. D. (1970). *The syntax of Japanese honorifics*. Berlin/Boston: Mouton de Gruyter.
- Portner, P., M. Pak. & R. Zanuttini (2019). The addressee at the syntax-semantics interface: evidence from politeness and speech style. *Language* 95(1), 1–36.
- Potts, C. (2003). *The Logic of Conventional Implicatures*. Ph.D. Thesis, UC Santa Cruz.
- Potts, C. (2007). The expressive dimension. *Theoretical Linguistics* 33, 165–197.
- Potts, C. & S. Kawahara (2004). Japanese honorifics as emotive definite descriptions. *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 14, 235–254.
- Rodriguez, J. (1604–1608). *Arte da Lingoa de Iapam*. Nagasaki: Seminrio. [邦訳: ロドリゲス [土井忠生 訳註] (1955) 『日本大文典』 東京: 三省堂]
- van Rooy, R. (2003). Being polite is a handicap: towards a game theoretical analysis of polite linguistic behavior. *Proceedings of the Conference on Theoretical Aspects of Rationality and Knowledge* 9, 45–58.
- Shibatani, M. (1977). Grammatical relations and surface cases. *Language* 53, 780–809.
- Shibatani, M. (1978). Mikami Akira and the notion of ‘subject’ in Japanese grammar. In *Problems in Japanese syntax and semantics*, ed. by J. Hinds & I. Howards, 52–67. Tokyo: Kaitakusha.
- Shibatani, M. (1985). Passives and related constructions: a prototype analysis. *Language* 61(4), 821–848.
- Shibatani, M. (1997). Grammatical relations and surface cases. *Language* 53(4), 789–809.
- Shibatani, M. (1998). Honorifics. In *Concise encyclopedia of pragmatics*, ed. by M. Jacob, 341–350. Amsterdam/New York: Elsevier.
- Sohn, H.-M. (2015). Evolution of Korean honorifics: A grammaticalization perspective. *Korean Linguistics* 17(2), 167–206.
- Svahn, A. (2016). *The Japanese imperative*. Lund: Lund University Publications.
- 滝浦真人 (2008). 『ポライトネス入門』 東京: 研究社.
- 滝浦真人 (2017). 『日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究』 . 博士論文. 北海道大学.
- Takiura, M. (forthcoming). Intersection of traditional Japanese honorific theories and Western politeness theories. In *Handbooks of Japanese Language and Linguistics*, ed. by Y. Asahi, M. Usami & F. Inoue. De Gruyter Mouton.
- 辻村敏樹 (1968). 『敬語の史的研究』 . 東京: 東京堂出版.
- Wechsler, S. (2011). Mixed agreement, the person feature, and the index/concord distinction. *Natural Language & Linguistic Theory* 29(4), 999–1031.
- Yadav, R. (1996). *A reference grammar of Maithili*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 山田孝雄 (1924). 『敬語法の研究』 . 東京: 寶文館.
- 山田里奈 (2015). 『近世後期江戸語から明治期東京語における尊敬語表現研究』 博士論文, 早稲田大学.
- Yamada, A. (2019). *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers*. Ph.D. Thesis, Georgetown University.
- Yamada, A. (2020a). An OT-driven dynamic pragmatics: high-applicatives, subject-honorific markers and imperatives in Japanese. In *New Frontiers in artificial intelligence: JSAI-isAI International Workshops, JURISIN, AL-Biz, LENLS, Kansei-AI Yokohama, Japan, November 10-12, 2019 revised selected papers*, 354–369. Cham: Springer.
- Yamada, A. 2020b. Multinomial mixed-effects models and linguistic variation: competitions among Japanese subject-honorific constructions. *Proceedings of the 10th conference of the Japanese Association of Digital Humanities (JADH 2020) “a new decade in digital scholarship: microcosms and hubs,”* 33–37.
- Yamada, A. (to appear, a). Honorificity. In *The Wiley Blackwell Companion to Morphology*, ed. by P. Ackema, S. Bendjaballah, E. Bonet, & A. Fbregas.
- Yamada, A. (to appear, b). Dissertation Abstract: The syntax, semantics, and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers. *Künstliche Intelligenz*.
- Yamada, A. & L. Donatelli. (2020). A Persona-based Analysis of Politeness in Japanese and Spanish. Online presentation at Logic and Engineering of Natural Language Semantics 17 (LENLS17), Online. Nov. 15.